



システリナ礼拝堂のイザヤ（ミケランジェロ）

阿佐ヶ谷教会



# 信友会会報

## 聖書研究 イザヤ書Ⅱ

—イザヤ書 40 章～66 章—

1 月例会・役員会（2020 年 1 月 26 日）報告

信友会では「預言者の生きた時代とその信仰」をテーマにこの 2 年間旧約聖書を学んできました。イザヤ書は 2 回目になりますが今回もまた大島力先生が 40 章以降をいっそう深く解説してくださいました。あらためて旧約聖書の時代背景とそれに連なる新約聖書への信仰の歴史的な流れを学ぶことができました。

これから春に向けて、新しい年度を迎える準備も忙しくなるとは思いますがどうぞ信友会の皆様も体力を整え、コロナなどウイルスの感染に気を付け、まもなくやってくる春に備えましょう。

(Y.O)

### 「預言者イザヤⅡ」～第二イザヤとその弟子たち～

大島 力先生

私は 1 年前の 1 月例会で「第一イザヤ」またエルサレムのイザヤと言われる預言者を取り上げました。今回は第二イザヤと第三イザヤに少し入ることにします。

第二イザヤと言われる無名の預言者は、第一イザヤから約 200 年後イスラエルのバビロン捕囚の後期に活躍しました。バビロン捕囚は約 50 年続きました。孫の代まで続く年月で、国破れ、領土を失った絶望の時代でした。紀元前 538 年にバビロニアがペルシャのキュロス王に破れイスラエル民族が帰還を許された時までです。なお、第三イザヤと言われる預言者は、民族の帰還後のイスラエルで荒廃した国土や民族の共同体の復興と神殿の復興期に活躍した預言者です。第二イザヤは、イザヤ書 40～55 章、第三イザヤは、イザヤ書 56～66 章の記載です。

#### バビロンからの帰還と困難

イザヤ書 40 章は、私たちにとって最も親しまれている聖句です。1 節から「慰めよ、わたしの民を慰めよとあなたたちの神は言われる。エルサレムの心に語りかけ 彼女に呼びかけよ 苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と 罪のすべてに倍する報いを 主の御手からうけた、と。」



ヘンデルはメサイアの冒頭に、この1～2節を取り上げています。50年孫子の時代まで変わらない抑留生活である苦役の時代は今や満ち、解放の時が来たと言います。固まった人間の心、囚われの身である民の心を溶かし、温めるのは容易ではありません。そこで第二イザヤは過去の事例を思い起こさせようとします。一つは出エジプトの恵みです。3節から「呼びかける声がある。主のために荒れ野に道を備え わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。」4節「谷はすべて身を起し、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。主の栄光はこうして現れるのを肉なるものは共に見る。」第43章16～17節には、「海の中に道を通し 恐るべき水の中に通路を開かれた方。戦車や馬、強大な軍隊を共に引き出し 彼らを倒して再び立つことを許さ



ず 灯心のように消え去らせた方。」19～20節に「見よ、新しいことを私は行う。…わたしは荒れ野に道を敷き 砂漠に大河を流れさせる。…わたしの選んだ民に飲ませるからだ。」出エジプトの恵みは、毎年祝う過ぎ越しの祭りや仮庵の祭りを通して誰でも知っている歴史で、民ははっと気が付きます。第二イザヤは捕囚

からの帰還は、出エジプトの歴史と同様に、神さまが近い将来に与えてくれる恵みであると言っているのです。

更に、帰還の喜びを理解できない人々に天地創造を持ち出して説明します。第40章26節以下「目を高く上げ、だれが天の万象を創造したのかを見よ。…地の果てに及ぶすべてのものの造り主、…主に望みをおく人は新しい力を得…」。このように心折れている人々に慰めと希望を与えようとしています。

### ペルシャ王キュロスへの期待

この時代中東ではペルシャ王国が台頭し、その結果バビロニアは、紀元前539年にペルシャ王国のキュロス王により滅ぼされ、イスラエルの民は紀元前538年にイスラエルへの帰還が許されるのですが、第二イザヤはこのキュロス王に期待をかけていました。第44章24節「キュロスによる解放」の小見出しがあり、「僕の言葉を成就させ 使者の計画を実現させる。エルサレムに向かって、人が住み着く、と言い ユダの町々に向かって、再建される、と言う。わたしは廃墟を再び興す。」28節に「キュロスに向かって、わたしの牧者 わたしの望みを成就させる者、という。エルサレムには再建される、と言い 神殿には基が置かれる、と言う。」45章1節に、「主が油を注がれた人キュロスについて 主はこう言われる。わたしは彼の右の手を固く取り 国々を彼に従わせ、王たちの武装を解かせる。」第二イザヤはキュロスをお注ぎの人とまで言い、イスラエルの救世主のように預言したことは、内外から批判がありました。まだバビロニアの支配下にあり危険を伴っており、まして、外国の王を救世主に見立てることは無理があったのです。

### 主の僕の詩

第二イザヤの後半、第49章から55章は捕囚からの解放直後の混乱期です。ここで主の僕の歌は、4か所に書かれています。初めに、第42章3節に「傷ついた葦を折ることなく 暗くなってゆく灯心を消すことなく 裁きを導き出して 確かなものにする。」があります。

神さまは、弱く傷つきやすい人間を折ることなく救済すると言います。この葦についてフランスの科学者でキリスト教思想家のブーレーズ・パスカルが「人間は考える葦である」という名言を残しました。病弱であったパスカルが弱く傷つきやすい葦に自分を見たのでしょう。第二イザヤ自身もこのように考えたと思います。

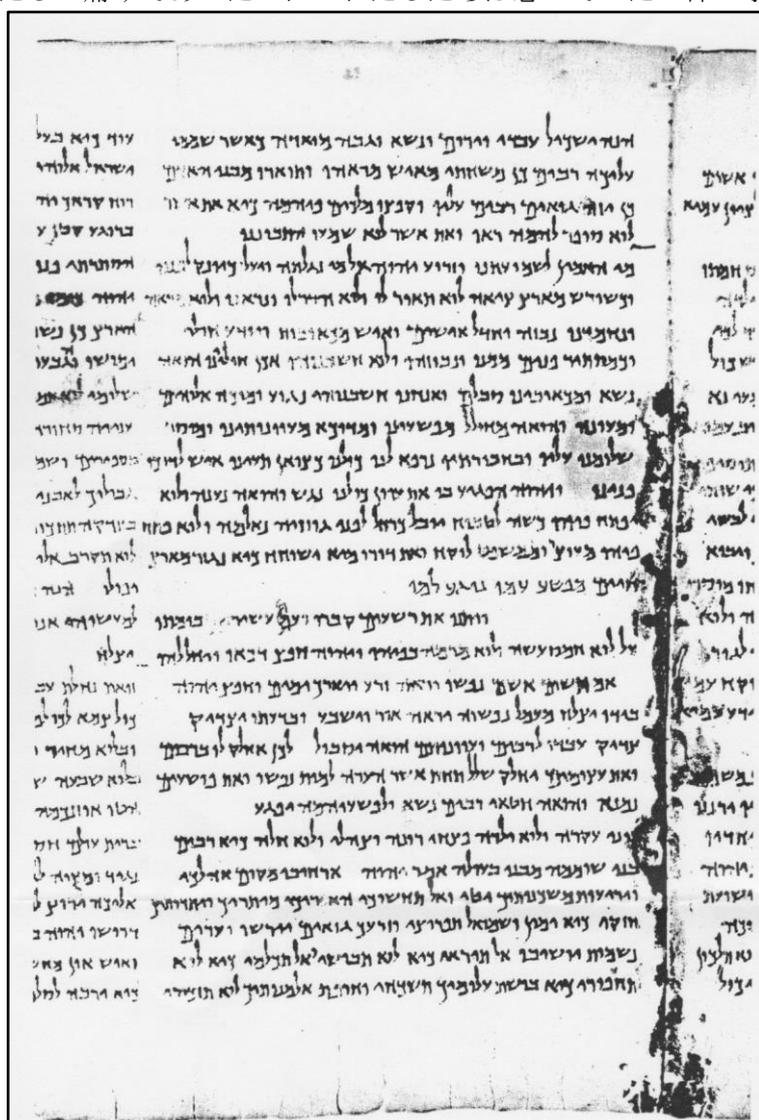
次に第 49 章 4 節に「わたしはいたずらに骨折り うつろに 空しく 力を使い果たした、と。しかし、わたしを裁いてくださるのは主であり 働きに報いてくださるのもわたしの神である。」神に全てを任せる姿が如実に表れています。3 番目は第 50 章 4 節の「主の僕の忍耐」の小見出しです。6 節から「打とうとする者には背中をまかせ ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。主なる神が助けてくださるから わたしはそれを嘲りとは思わない。わたしは顔を硬い石のようにする。わたしは知っている わたしは辱められることはない。」50 年を経過したバビロンからの帰還の事業は困難を極めたようです。人々の思いも一筋縄ではなく、受け皿としてのイスラエルの状況も問題だらけでした。イザヤはうまく展開しない帰還事業に熱心なあまり、こんなはずではなかったとその嘆きは深かったのです。

### 苦難の僕の詩

いよいよ旧約聖書のハイライトの一つである「苦難の僕」に入ります。

この苦難の僕の詩はイザヤ書 52 章 13 節から 53 章 12 節までです。小見出しに「主の僕の苦難と死」で、最初と最後に神の語りがあり、その間の挟まれた部分で僕の苦しみと死が語られます。この詩の中心は 4~6 節から「彼が担ったのはわたしの病 彼が負ったのはわたしの痛みであったのに わたしたちは思っていた 神の手

にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり 彼が打ち砕かれたのは わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって わたしたちに平和が与えられ 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。わたしたちは羊の群れ 道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて 主は彼に負わせられた。」ここで、彼は「主の僕」を指し、わたしたちは「主の僕の弟子たち」です。バビロンからの帰還について苦難、慰めや希望を語っても民衆は理解せず困憊し、弟子たちまでも誤解して信頼を失っています。(新約聖書においてもイエスの 12 弟子はイエスの捕縛と十字架の死に際して心が揺らぎ散りぢりになりました。)しかし、刺し貫かれたのは自分たちの背きのため、打ち砕かれたのは自分たちの咎のためであり、彼の受けた傷によって癒されたことを示され、我に返ったのです(5 節)。6 節における、勝手に四方に散って行く羊の群れの姿は、イスラエルへの帰還の難しさを語り、弟子たちも混乱に巻き込まれたことを示します。第二イザヤと言われるこの人物は、バビロンで死亡し、残された弟子たちがこの預言書を纏めたと思われます。イエスの十字架の死について弟子たちが旧約聖書に学んでい



図はクムラン写本のイザヤ書(巻物)イザヤ書 52 : 13~53 : 12

たときにこのイザヤ書 53 章の詩はキリストの十字架を暗示する一つの光になりました。また、この箇所は新約聖書において多く引用され、マタイ 8 : 17、1 ペトロ 2 : 24、ルカ 22 : 37、使徒 8 : 32—35 などがあります。

### 第三イザヤ 主の僕の祈り

第三イザヤは、イスラエルへの帰還を終え、荒廃した国土での民族としての共同体の構築や神殿の再建期に活動した預言者で、第二イザヤの弟子たちであると思われます。第三イザヤは個人でなく複数であったと思われます。今回はクムラン写本のイザヤ書 52 章 13~53 章 12 と 61 章 1~4 の部分のコピーを持ってきました。イエスがルカ福音書 4 章 16 節からで、故郷ナザレに帰り、会堂でイザヤ書 61 章を読みます。クムラン写本はイエスの登場より古い時代に編纂されているので、私はイエスがこれと同じ型態の巻物を読んだと思っています。

第三イザヤは、イスラエルの再興がうまく進まないことを憂います。そして嘆き、執り成しを祈りました。イザヤ書 63 章 7 節からは「執り成しと嘆き」の小見出しです。15 節に「どこにあるのですか あなたの熱情と力強い御業は。あなたのたぎる思いと憐れみは。抑えられていて、わたしに示されません。」イザヤは、出エジプトの歴史でモーセに与えてくださった恵みを数えて祈っており、神の熱情と力強い御業を与えてくださいと祈ります。ここで神の「たぎる思いと憐れみ」が示されることを求めています。たぎる思いは、「腸（はらわた）の興奮」で、憐れみは「子宮」という語に由来し、生みの苦しみを表現する言葉です。イエスが「深く憐れむ」と言った時には、「腸がちぎれる思いに駆られて」です。北森嘉蔵先生が「神の痛みの神学」を掲げましたが、根拠となった聖書箇所の一つはここです。イエスが重い皮膚病に悩む人に出会った時の思い。また、ルカ福音書 15 章の放蕩息子が帰った時の父親の行動にも、この深い憐れみが示されています。このイザヤ書 63 章 7 節からの預言者たちの祈りは共同体の再構築、神殿の再建の困難な中での血のにじむような祈りだったのです。

（文責：玉澤武之）